ロシア語文法ノート
—日本のロシア語教科書・文法書に見られる誤りについて—

柳　沢　民　雄

0. はじめに

本論は我が国のロシア語教科書や文法書，また参考書に見られる初歩的な誤りの幾つかを指摘するものである. ロシア語という言語はかなり研究尽くされており, 現代ロシア語に関しても個々の文法事項には定説がある．その根拠となるのは，ロシア本国の『アカデミー文法』（特に，『80 年アカデミー文法』）であると思われる．欧米の著名な研究者によるロシア語文法もアカデミー文法を典拠にしていることは言うまでもない．従って，私がここで「誤り」と見做す根拠は，ロシアの 80 年アカデミー文法の解釈を主にするのであるが, それ以外にチェコのアカデミーによる『ロシア語文法』（本論では『プラハ版アカデミー文法』と呼ぶ），ヴィノグラードフの『ロシア語（語についての文法学説）』(Виноградов 1972[2] [1947])，及びイサチェンコの『スロヴァキア語と対照したロシア語の文法構造』(Исаченко 1954, 1960) の文献を根拠にしている．音論では主としてボドゥアン・ド・クルトネ (Бодуэн де Куртенэ 1963, 2012)，ヤーコヴレフ (Яковлев 1923)，アヴァネーソフ (Аванесов 1956, 2015)，ヤコブソーン (Jakobson 1962, 1984) 等の考えを根拠にしている.

教科書や文法書，また参考書において，音論と形態論に関しては誤りと見做すことがはっきりと指摘することができるが，統語論に関しては解釈の違い，あるいは初級者を対象にするということもあり，正確さを犠牲にした表現を使ったと考えられる箇所もあるかもしれない．しかしそのような場合でも，我が国のロシア語の教科書や文法書を書いている人たちは，日本の伝統的な文法解釈を踏襲しているのがほとんどである．この「伝統的な文法解釈」とは, 日本のほとんどのロシア語教科書や文法書に見られる解釈であり，日本のロシア語教育で何の批判もなく使われてきた解釈である．例えば,「定動詞／不定動詞の区別のある動詞はともに不完了体であるが，その両者に同じ接頭辞がつくと，新しい意味の動詞の完了体と不完了体ができる．なお，接頭辞にのついた動詞には, もはや定／不定の意味の区別はない. 」（佐藤純一『NHK 新ロシア語入門』日本放送出版協会 p.165）このような解釈は, 私の手にした教科書や文法書の至る所に見られるものである．このような解釈に対する批判は我が国ではなされないが，外国の文献ではこのような解釈に対する批判が出ている．私の考えもこういった伝統的な文法解釈をとら

ないので，ここでは「問題のある解釈」として論じている．

本論で批判的に採りあげている教科書や文法書，また参考書は，出版社から送られてきた教科書，古くからの日本のロシア語文法を代表するもの，また最近に出版され，私が目にした文法書を引用した．網羅的に教科書や参考書を調査し批判することはその専門家にお任せしたい．なお，Garde (1998[2]) の翻訳であるポール・ギャルド『ロシア語文法：音韻論と形態論』（ひつじ書房）の訳注では，ロシア語文法一般と我が国の教科書や文法書の間違いについてさらに詳しく論じている．

1．音論，正書法

ロシア語教科書の多くが音素と書記素を混同している．これは我が国のロシア語教育の悪弊であって，ここから形態論の無理解が生じており，その結果として形態を間違えて解釈している．つまりロシア語の文字を音素と混同することによって，我が国だけに見られる幼稚な間違いが生じている．例えば，ロシア語の母音の数は「10 個ある」とか，ロシア語の母音には「硬母音」と「軟母音」を区別するとか，といった間違った表現が見られる． こういったことを書いている人たちは，ロシア語の音韻構造を理解しないために，子音の違いを母音の違いだと勘違いして，母音をそのように区別するものと考えているのである．

こういった音素と文字の関係を理解しない人たちは，形態論においても全て文字を頼りにした分析を行う．例えば，名詞を「硬変化（硬語尾）」と「軟変化（軟語尾）」に分ける．こういう人の герой の分析は，-й を「軟変化（軟語尾）」とする（源貴志『ロシア語　セカンドステップ』東洋書店 2011，p.3, 18）．実際は，герой の末尾の й は語幹の一部であって，語尾はゼロであると解釈するのが，1 世紀以上前からの定説である．次のボドゥアン・ド・クルトネの発言を参照されたい：「語を『語根』，『接頭辞』，『語幹』，『語尾』に形態論的に分割することは我々の『学者』や『教師』達によって次のように行われている：вод-а …, дын-я, земл-я …, ше-я, зме-я, стру-я …, стол-ъ …, кон-ь …, кра-й, обыча-й … . このような荒削りのそして無意味なやり方がたとえどれほど罪のないもののように思えたとしても，それでもそこには概念の混乱と混同，つまり文字と音との混同，書記素と音素との混同が見られる．これを行う紳士達は文字を盲信し，そして彼ら自身が『文字』と呼んでいるものが何なのか全く分からないのである．彼らは実際の形態素（語の形態的な部分）と，発音され聴覚されるもののおぼろげではっきりしない何らかの結合との見分けがつかないのである．なぜならば，彼らによって引用された『語尾』я (дын-я ше-я), й (кра-й …), ъ, ь (стол-ъ …, кон-ь), つまり『語尾』а, я また『語尾』й と並んで『語尾』ъ, ь を立てることをいったいどうやって他に説明することができようか．こういった『権威ある威光』を笠に着て行動する我らの『教育者』に我々は，言

語の一部だけでなく言語一般に関する我々の思想を害する毒を頂戴しているのである．語の分割のこのような手法は，害があり，それ故，許しがたいものであることを宣言して，我々は断固これを拒絶すべきである．」(Бодуэн де Куртенэ 2012 §90, 1963: 224-225) 勿論，現代ロシア語の語尾の分析はクルトネと同じである．例えば，Ожегов & Шведова (2009: 924) の辞典の変化表では, край の変化は「край, кра-я, …」として記載され（кра-й でないことに注意），その注に「語幹のヨット j は母音語尾に合併している」と記されている．以下，具体的に教科書，参考書，文法書に見られる誤りや問題点を指摘する．

２．ロシア語の母音音素は５つである

ロシア語の ы と и を独立した２つの音素とみなすのか（６母音説），あるいはこれらは１つの音素 /i/ であり，ы はこの音素の異音であるのか（５母音説），という問題は長年論争が続けられてきた．例えば,『60 年アカデミー文法』(1953: I. 52–53 [1960: 50–51]) では，舌の位置の対立を基にして и, ы, у, э, о, а の６母音が母音音素とみなされている．このためであろうか，日本でも井桁貞敏『標準ロシア語文法』三省堂 (1961: 16) には６母音説が唱えられているし，和久利誓一『テーブル式　ロシヤ語便覧』評論社（p. 14）でも６母音とされている．井桁氏は и と ы の音声的な違いを強調し, これらを独立した音素と見なしている．またこの傍証としてこの２つの音が異なる起源をもつことに触れているが，現代ロシア語の音素認定にその音の由来の違いを理由に挙げても何の傍証にもならない. 歴史的に音素は合流あるいは分裂することは諸言語によくあることである．今では５母音説が定説である．例えば，日本語で出版された数少ない学術的なロシア語文法書である, Ch.-J. ヴェラン『ロシア文法』（矢野通生訳 p. 15）[Veyrenc (1968: 13-14)] もまた５母音説をとっている:「ы については，１つの音素としてではなく，その基本的な実現が文字 и によって表される音素の，たんなる結合的変異音とみなされねばならない点に注意すべきである．ы の出現はすべての硬子音の後で自動的なのであるから，ы は語と語を区別するために自由に и に対立することはけっしてできない．このような２つの動詞 быть《である》と бить《打つ》の区別は子音音素の対立 /b/ / /b’/ に基づいているが，母音音素は両者において同じく /i/ である．」

私が直接に文献で知る限り，ы と и を一つの音素と見なしている学者は次の通りである[1]．ボドゥアン・ド・クルトネ Baudouin de Courtenay (1912 [Бодуэн де Куртенэ 2012[2]: §44])；ヤーコヴレフ Яковлев (1928 [1970: 132])；カルツェフスキ Karcevski, 1943 [2000: 16]；トゥルベツコイ Trubetzkoy (1962[3]: 99)；アヴァネーソフ Аванесов とシードロフ Сидоров (1945)；Аванесов (1956: 171)；ヤコブソーン Jakobson (1962: 556–567)； Morris Halle (1959)； Jones & Ward (1969: 28)；『70 年アカデミー文法』(1970: 11); プラハ版アカデミー文法 (I. 5–6)；『80 年アカデミー文法』(I. 76).

さらに，ы を独立した音素と見なさないことについては，Белошапкова (1997: 127-130) が簡便に述べている（この項の執筆はパノーフ М. В. Панов）:「長い間，音 [и] ‖ [ы] の音素的な関係は多くの議論を引き起こしてきた．いまではこの問題は学問的な緊急性を失っているが，しかし思慮ある音韻論的な見解を養うためには，たとえ短くともこの問題を検討することは有益である」と述べ，この問題がすでに解決済みであることを強調し，次のような見解を述べている：「交替 [и] ‖ [ы] は位置的である：硬子音の後ろでは母音 [ы]（しかし [и] ではない）が可能である；硬子音の後ろでないところでは母音 [и]（しかし [ы] ではない）が可能である．『硬子音の後ろでないところ』という定義は３つの可能性を含んでいる：a. 軟子音の後ろ；b. 母音の後ろ；c.『何もない』後ろ，つまりポーズの後ろ」．このように述べた後，背理法による証明（例えば，もし <и> と <ы> を別々の音素として認めるならば, я [и]ду — он [ы]дет, на [и]збах — над [ы]збами の場合において音素の交替が生じる．しかし先行する語に依存して語頭の音素の組織的な交替はロシア語には存在しないこと．またロシア語には дым — сидим, большими — твоими のような間に韻があること，すなわち [и] — [ы] は同じものであると韻がみとめていること．また лист — листик, карандаш — карандашик において，もし <и> と <ы> を別々の音素として認めるならば，２つの異なる接尾辞 <ик> と <ык> も認めなくてはならなくなること等）を試みて，次の結論を下している：「<ы> が『音素』であるという間違った仮定を検討すると，我々はまた言語とは体系であるということを確認することができた：<ы> が一つの音素であるという音声的な諸事実の誤った解釈は，音声学だけでなく形態論や語形成論や詩学にわたる一連の馬鹿げた結論に導いてしまうのである．」

上に挙げた５母音説を支持する学者たちは，ヤーコヴレフ，トゥルベツコイ，ヤコブソーンらの流れを汲むモスクワ音韻学派の人々である．対する６母音説のレニングラード音韻学派の人々はシチェールバ Л. В. Щерба を中心とする人々である．シチェールバは，音素認定の基準を生理的・音響的特徴による類似性を基にし，[и] と [ы] を同じ一つの音素とは認めない．例えば, Щерба (1974: 157［1918 年の講義］) 参照:「ロシア語の母音は６つ：и, е, а, о, у, ы ただそれだけ，それ以上はすこしもない．しかしこれら６母音音素のそれぞれは甚だ異なって発音される」. またシチェールバの死後に手稿（1942–1943 年のもの）をもとに出版された «Теория русского письма» (Щерба 1974: 191–229) の中の「音素 „ы“」の章で彼は次のように書いている：「„ы“ が独立の音素であるのか，あるいはボドゥアン・ド・クルトネ教授がすでにこのことを断言していたように，単なる音素 „и“ のヴァリアントであるのかという議論の余地ある問題に取りかかろう. 実際に „ы“ と „и“ はあまりにも密接なペアを成しているので，子音の後ろで機械的にお互いを置き換える，しかも軟子音の後ろではただ „и“ だけが立ち，硬子音の後ろではただ „ы“ だけが立つ；ы/и の対立は単に硬子音と軟子音の対立の音声的機能でしかない．（中略）かくし

て „ы“ と „и“ はあたかも単一の音素のヴァリアントとして見なさなくてはならないかのようである．このヴァリアントの内で主要なものは „и“ として見なさねばならないだろう．というのも „ы“ は独立した位置には決して現れないからである．（中略）しかし直感的に何かが „и“ と „ы“ を同じ一つの音素であると見なすことを邪魔するのである．また実際に，具体的なロシア語の語の中に „ы“ は決して独立した位置で現れないけれど，それにも拘わらずそれを分離独立させ，そして結局，動詞 акать, окать, экать, ¹икать との類推によって動詞 ¹ыкать (Д. Н. Ушаков の実例) をつくることを少しも妨げないのである．もしそうだとするならば，たとえ „ы“ の出現は大部分の場合に音声的に条件付けられているとしても，„ы“ が独自の音素ではないと主張することは困難である．（中略）現時点で現状はこのようであるが，言語の発達がどのようにこの先進むかは確信をもって言うことは困難である．いずれにしても独立した „ы“ を今全く拒否する根拠はない：潜在的にそれは独立した位置にも立つことができるし，また語 ¹икать / ¹ыкать を区別することができる.」(ibid. 228–229)

モスクワ音韻学派の人々はレニングラード音韻学派のこのような考えを《物理主義 физикализм》として批判する．Аванесов (1956: 37ff.) によれば，シチェールバらは《語形態 словоформа》を出発点として，この音的な外形の中で最小の音単位を研究する．これに対してモスクワ音韻学派の研究者は《形態素 морфема》を出発点として，その同一性が音素の概念の大きさと境界を決めるとする．それ故，前者の研究者は強い位置ばかりでなく，弱い位置においても区別される最小の音単位を音素と見なす（例えば，語 [дом] の各音だけでなく（強い位置），語 склад [склат] の [т], 語 вод¹а [вʌд¹а] の [ʌ]（弱い位置）も音素と見なす）．他方，後者の研究者は強い位置において区別される音単位をもって，それと位置的に交替する全ての音の系列を１つの音素と見なす（例えば，вод¹а [вʌд¹а], в¹оды [в¹оды], н¹а воду [н¹а-въду] の場合，母音 [ʌ] と [ъ] は音素 [о] のヴァリアントと見なされ，交替する全ての音の系列 ([о] // [ʌ] // [ъ]) は１つの音素と認定される．全く同様に вод¹а [вʌд¹а], вод [вот], вод¹е [вʌд’¹е] の場合，子音 [т] と [д’] は音素 [д] のヴァリアントと見なされ，交替する全ての音の系列 ([д] // [т] // [д’]) は１つの音素と認定される）．後者の研究者の観点においては，機能面が首尾一貫して考慮され，音素と形態素の間の有機的な結びつきが達成されている．つまり音声体系は総体としての言語構造のなかに有機的に組み込まれている．

ある学説が正しいか正しくないかは，その学説が次の世代に受け入れられるかあるいは受け入れられないかということによって決まるとすれば，前述のパノーフが論じているようにすでにこの問題の決着はついている．ы [ɨ] が語頭に現れないこと，また ы [ɨ] と и [i] の交替（例えば，接頭辞や前置詞の後ろにおける交替：играть ~ сыграть, Индия [¹ind’ijə] ~ в Индии [¹vɨnd’iji] を参照．またパノーフの挙げているような同じ形態素にお

ける両音の交替), および硬子音と軟子音の後ろでのそれら２つの音の相補分布を成す出現は５母音説を支持する.

３．ロシア語に「硬母音」と「軟母音」はない

ロシア語の母音に「硬母音」と「軟母音」の音韻的な対立はない．音韻論的に対立するのは「硬子音」と「軟子音」の対立である[2]．Karcevski (1943 [2000: 13]) は «Remarques sur la phonologie du russe» の中でこう書いている:「子音は全て音韻的に硬いか, あるいは軟らかい音素である．確かに，硬口蓋化された母音は存在するが，しかし a : ä, o : ö, u : ü タイプの音韻的価値をもつ対立は存在しない．反対に，нос nos《鼻》: нёс n'os《(私は) 運んだ》，мол mol《防波堤》: моль mol'《紙魚》，等【の子音の対立】を比較せよ.」

プラハ版アカデミー文法 (§191) はこれを次のように書いている：「子音書記素そのものは湿音性に関しての対立を伝えはしない．この対立は子音書記素と結びついた母音書記素 {a} ~ {я}, {o} ~ {ё}, ...（つまり {Та} ~ {Тя}, {То} ~ {Тё}, ... , 例えば，ко дну ~ ко дню）, と補助記号 {ь}（つまり {Т} ~ {Ть}, 例えば，пыл ~ пыль, п'олка ~ п'олька）によって伝えられる.」

上の例でも分かるように，нос /nos/ ~ нёс /n'os/ において，o ~ ё の対立は書記素の対立であり, 言語の実際の対立は硬子音 /n/ ~ 軟子音 /n'/ の音素対立である．我が国の教科書や参考書を書く人の中にはこのことを理解せずに，o を「硬母音」，ё を「軟母音」と考え（書記素と音素の混同), ロシア語には「硬母音と軟母音の区別がある」といったことを書いている．こういったことを書いている人の母音の記述を読むと，я, ю, ё を「軟らかく感じ」, a, y, o を「硬く感じる」というような実に奇妙な記述が散見される．ロシア人がどう「感じる」かとは関係なく，母音に「硬」と「軟」の区別はない．さらに我が国の「学問的なスラヴ語・ロシア語研究の基礎を築いた」と言われる人でも「母音は硬母音と軟母音に分かれる．a, o, y, ы, э が硬母音, я, e, ё, ю, и が軟母音である.」（八杉貞利・木村彰一『ロシヤ文法』岩波書店 1953, p. 2）と書き，そして母音をこのように二分したのちに，この著者たちは軟子音についてこう書いている：「子音が軟母音の前にある時には，ь が書いてある時と同じく，軟子音に発音され，母音は硬母音として止まるのである. 従ってこの場合は便宜上軟母音の持つ [j] の要素が子音と結合して軟子音を作るものと考えてよい．例えば тя = [t] + [ja] = [t'] + [a] = [t'a] なのである.」（ibid. p. 8）これは全く馬鹿げた考えであって, 今日まで続く日本のロシア語の音についての間違いを生み出した元凶と見做しうるであろう．現代ロシア語の軟子音音素 /t'/ は，その後ろの j と結合してできるのではない．また「便宜上」にもこのように考えてはいけない．音素 /t'/ は（それ以外の軟子音も同様に），その後ろに彼らの謂う「軟母音」があろうがなかろうが，現代ロシア語の音韻体系の中に存在するのであり，それをロシア語の書記

法では全ての軟子音を独自の記号で表すことをせずに，所謂「軟母音字」という第2系列の母音書記素との結合によって表すのである[3]．全ての軟子音を何らかの記号を使って（例えば，記号 ь を伴って）書き表すとしたら，ロシア語の書記法はかなり煩雑になるだろう．例えば，тётя /t'ot'a/ は тьотьа と書き表すことになる（これを一部実行しているのは，リトアニア語である．そこでは後舌母音の前の子音が軟音であることを示すために文字 i が使われている：siaũras [s'æũras]）．２つの系列の母音書記素（所謂「硬母音字」と「軟母音字」）を使ってロシア語の子音書記素を全て表すことのほうが書記素の数を減らせて経済的である[4]．彼らの「母音は硬母音と軟母音に分かれる．a, o, y, ы, э が硬母音，я, e, ё, ю, и が軟母音である．」という間違いが，上のような軟子音についての間違った解釈を生んでいると考えられる．彼らの言う「軟母音」я, e, ё, ю は，音素 /j/ と音素 /a/, /e/, /o/, /u/ の結合したことを表す書記素であって，そういった /j/ と母音との結合は語頭と母音の後ろ，あるいは記号 ь, ъ の後ろで使われるだけである．こういった書記素は，ヤーコヴレフの言う「現代語にとって，また文字にとって全く余計な音節の意味」(Яковлев 1928 [1970: 134]) を表しているに過ぎない．

八杉貞利・木村彰一『ロシヤ文法』の影響かどうか分からないが，今日においても「ロシア語は硬母音と軟母音を区別する」といった誤りをスラヴ語学やロシア語学の専門家と言われる人たちが書いているのには呆れるばかりである．このような誤った考えに対しては，Baudouin de Courtenay (1972: 289) [1929, Einfluss der Sprache auf Weltanschauung und Stimmung, *Prace Filologiczne*, XIV, pp. 331–36. (Sonderabdruck aus PR, pp. 35–36)]) (E. Stankiewicz の英訳) を参照されたい：«In systems of writing which combine the principle of phonemography with elements of morphemography, the parallelism or lack of parallelism between the chain of sounds and the chain of printed symbols, between the sequences of graphemes and the sequences of phonemes, generally exerts an influence upon the mode of thinking. Thus, for example, in Russian phonemography, certain properties of the consonants are graphically rendered not by graphemes which usually stand for consonants but by the symbols for vowels that follow them or by the substitutes for vowels. In the Russian letter combinations *ba / bja, tu / tju, sè / se, p'' / p', l'' / l', ly / li*【*ба/бя, ту/тю, сэ/се, пъ/пь, лъ/ль, лы/ли*】, etc., the symbols for the consonants are identical, but the symbols for the vowels differ; in pronunciation the reverse is the case: the consonants differ (*l'' / l', p'' / p'*, etc.【*лъ/ль, пъ/пь* ...】), but the following vowels (excluding the zero vowel) are identical. This lack of parallelism leads to a confusion of concepts, to a confusion of letters with sounds, of graphemes with phonemes, so that one speak <misleadingly> of the "soft" vowels ja, ju, je, ji and the "hard" vowels a, u, e, y.»

これと関連して，名詞の曲用に「硬変化」と「軟変化」の区別などないことは明らか

である．文字からそのような区別を行う人について，次のイサチェンコ Исаченко (1954: 153) の発言を参照されたい:「文字の上では『硬』語幹と『軟』語幹の間の違いは表現される. 例えば, стол-^{1}а // кон-^{1}я, стол-^{1}у // кон-^{1}ю, стол-^{1}ом // кон-ём, pl. стол-^{1}ам // кон-^{1}ям, стол-^{1}ами // кон-^{1}ями, стол-^{1}ах // кон-^{1}ях. しかしこの場合，語尾の綴りはパラダイムそのものの形態論的な特徴ではなくて，ロシア語の文字法の特徴だけを反映している．というのも文字 -я, -ю, -ё は軟子音の後ろで音 -a, -y, -o（あるいはそれらの無アクセントのヴァリアント）を表記している．要するに，形 кон-^{1}я, кон-^{1}ю, кон-ём は単に形 [kan’-a·], [kan’-u·], [kan’-o·m] の文字法的なヴァリアントであるにすぎない．そこでは語尾そのものは，стол-^{1}a, стол-^{1}y, стол-^{1}ом タイプの『硬』語幹の語尾と何ら違わないのである.」

Timberlake (2004: 28) や Реформатский (1970: 494-499) が言うように，ロシア語の音論で最も重要なポイントは, 硬子音～軟子音の対立である.「軟母音」があると信じている人にロシア語の音体系が理解できるはずがない.

４.「硬音記号 ъ」は必ずしもそれに先行する子音の硬音性を示すことはない

記号 ъ について, それに先行する「子音字が硬いままで読まれることを示す」（諫早勇一，服部文昭，大平陽一『セメスターのロシア語』白水社）と書いてある教科書があるが，ъ の前の子音は必ずしもロシア語では硬子音として発音されるとは限らない.

Яковлев (1928 [1970: 134]) は, この文字 ъ について「硬子音の後ろで音 й を表すための ъ あるいは « ’ »」と書いている．この Яковлев の説明は核心を突いている．というのもこの文字の後ろの音は必ず j によって始まる母音であるからである. また, Аванесов (1954: 96) は次のように指摘している：「所謂，『分離の』ъ の前で（話し言葉で [j] の前，普通は接頭辞と語根の境目で），音節を形成しない接頭辞 с は軟化する：[c’jел], [c’jê’з’д’ил], [c’jé]хались, [c’jó]мка. 普通，[j] の前でまた，音節を形成しない接頭辞 в- も с- も軟化する：[в’jе]зд, [в’jé]хать, [в’jи^{c}]зж^{1}ать, [в’jé]лся, [в’jи^{c}]д^{1}аться, [в’jäв’]е. より頻繁にまた接頭辞 из- の子音 [з] も軟化する：и[з’já]ть, и[з’já]н, … 接頭辞 раз- の子音 [з] は古いモスクワ標準に準じて軟化されることも，また軟化されないこともある (あるいは不完全に軟化される)：ра[з’jé]хались, ра[з’jé]ло, … と ра[зjé]хались, ра[зjé]ло, … .［ j] の前の接頭辞 от-, под-, над-, перед-, об- の子音 [т], [д], [б] は現代ロシア語では軟化されない：о[тjé]хал, о[тjé]лся, … по[дjé]хал, … пре[дjá]влен, … по[дjó]м, о[бjé]хал, … .」

80 年版アカデミー文法 (I. 44) は接頭辞の末尾の子音が軟子音（また硬子音も可能）の例を挙げている： ра[з(з’)j]éзд（正書法では разъезд), по[д(д’)j]éзд（正書法では подъезд), [с(с’)j]ел（正書法では съел）．アカデミー文法ではこの軟子音の発音を古いモスクワの標準としている．プラハ版アカデミー文法 (§191) はこの記号について正確に定義している：「{Тъя} タイプの結合において，補助書記素 {ъ} は子音書記素に結びつけられるとい

うよりもむしろ後続の母音書記素と結びつけられる．しかもその上，その記号はその子音の非硬口蓋化特徴を表示するためには役だっていない．実際，{Тъя} タイプの結合において伝達される子音は硬口蓋化子音であることも非硬口蓋化子音であることもありうる（例えば，съ[1]ездить :: объ[1]ездить）．その記号の特徴は，形態素境界における対の子音と /j/ の結合についての規則によって定義される．」

最近出版された Лекант *et al*. (2013) は，«филология» を専門とする学生用の教科書とのことであるが，特に音論と書記法の章（Л. Л. Касаткин の執筆）はその入門として優れている．Касаткин は分離記号 ъ と ь について次のようにその本質を書いている：「分離記号 ь は先行する子音の軟音性を示さないし，また分離記号 ъ は先行する子音の硬音性を示さない．ь の前でも，ъ の前でも子音は硬くも，半分軟らかくも，軟らかくも発音されうる：*вьюга* — [в’j[1]уга], [в·j[1]уга], [вj[1]уга]; *съезд* — [с’jэст], [с·jэст], [сjэст]; *адъютант* [ад’ɥут[1]ант]; *шью* [шjу]. *сбъём* と *побьём*, *обезьяна* と *без изъяна* の語において，分離記号の前の子音は多くの話し手によって同じに発音される．従って，子音音素の硬音性 / 軟音性は分離記号 ь, ъ によっては文字の上では表示されない．分離記号 ь, ъ は同じ書記法的機能を果たしている：それらの分離記号はそれらの後ろに来る多価値的な文字 я, ю, е, ё, и の意味を明確にし，これらの文字が２つの音素— /j/ とそれぞれの母音 (/ja/, /jo/, etc.) —を表していることを示しているのである．それ故，それらの記号はときに警告記号 предупредительные знаки と呼ばれる．分離記号 ь あるいは ъ の使用は正書法の規則によって決まる．文字 ъ は，ь と同じ機能を果たしているのであるから，ロシア語の文字の中では余計なものである．」(ibid. 141)

５．в の前の阻害子音はある条件のもとで有声化する

全ての教科書や文法書では子音の有声性の同化について，「в の前ではこの同化が生じない」と書かれている．ロシア語の音声の専門書である，神山孝夫『ロシア語音声概説』研究社 (2012: 102) においても，「в の前の無声噪音は有声化しません．かつて в が鳴音扱いだったことの名残です．」と書かれている．

しかし実際は，ある条件の下で в の前の子音は有声化する．この現象を最初に発見したのはロマーン・ヤコブソーンである．ヤコブソーンは論文《ロシア語における有声阻害音と無声阻害音の配分 Die Verteilung der stimmhaften und stimmlosen Geräuschlaute im Russischen》(Jakobson 1956 [1971[2]: 505-509]) の中で次のように書いている：「(a) ある阻害音が有声阻害音に先行する場合には，両者が直接隣接するか，或いはそれらの間に単一子音のもしくは長子音の，硬音のもしくは軟音の，v が介在するか，の如何に係わりなく，最初の阻害音も有声的となる．語中における例：просьба [-z’b-]《請願》，отзыв [-dz-]《反響》，сдача [zd-]《引渡し》，к жене [gž-]《妻の方へ》，трёхдневный [-ɣd-]《３

日間の》．これに対し中間に [v] を有する例：от вдовы [-dvd-]《未亡人から》，с вдовой [zvd-]《未亡人と共に》，к вдове [gvd-]《未亡人の所へ》，от взглядов [-dvzg-]《視線 (複数) から》，к вздохам [gvzd-]《溜息の方へ》．後続語の有声阻害音の前における例：этот город [-d|g-]《この町》，купец был [ʒ|b-]《商人が～であった》，здесь же [z'|ž-]《丁度此処に》，лечь бы [-ǯ|b-]《横になりたいものだ》，хоть дома [-d'|d-]《せめて自宅ででも》，так зло [-g|z-]《非常に意地悪く》，запах дыма [-ɣ|d-]《煙の匂い》，близ берега [-z'|b'-]《岸の近くに》，сквозь доску [-z'|d-]《板を貫いて》；次に，後続語の語頭における単一子音のもしくは長子音の [v] を中間に有する例：как вдова [-g|vd-]《未亡人のように》，хоть вздохнул [-d'|vzd-]《(彼が) 嘆息したけれども》，вот в детстве [-d|vd'-]《幼時にこそ》，чтоб взять [-b|vz'-]《取るために》，поев вдоволь [-v|:d-]《たらふく食べた後で》，против вдовы [-v|:d-]《未亡人と向かい合って》，уж в вдовах [-ž|v:d-]《既に未亡人として》．語末音の [v] または [v'] を中間に有する例：волхв же [-ɣv|ž-]《魔法使いこそ》，без жертв бы [-dv|b-]《犠牲者がなければよいのだが》，от молитв де [-dv|d'-]《祈りから，とのことだ》，ветвь даже [-d'v'|d-]《枝さえ》．(b) 他のすべての位置においては阻害音は無声的である．」（矢野通生訳《ロシア語における有声阻害音と無声阻害音の配分》，ロマーン・ヤーコブソン『構造的音韻論』岩波書店，1996，p. 259）[5].

6．移動母音は e, o 以外に и によっても現れる

移動母音（出没母音）беглые гласные は，教科書や文法書では e と o のみが記されている．例えば，「名詞･形容詞のある変化形の語末の子音の前に，同じ語の他の変化形にはない母音 o, e が入っていることがある．例えば отц-а, отец; окн-о, окон; свободн-ый : свободен. この o, e を「出没母音」と呼ぶことにする．」（八杉貞利･木村彰一『ロシヤ文法』岩波書店 p. 15）しかしながら移動母音として и が現れる場合がある．このことを理解しないために，語形を間違えて解釈する人は多い（下の７．所有形容詞形を参照）．80 年アカデミー文法 (I. 508) では移動母音は次のように書かれている：「ある語形では母音 /o/, /e/, /и/ と /α_1/ の存在が示され，同じ語の他の形では《母音ゼロ》の存在が示される．移動母音は普通，非音節的（ゼロ）語尾をもつ語形に現れ (ров, день, ущелий), 他方,《母音ゼロ》は音節語尾をもつ語形に現れる (рва, дня, ущелья)」．Gen. pl. ущелий の移動母音 и は次のように現れる：ущ^{1}e/l'#j-ø/ > ущ^{1}e/l'ej-ø/（# は移動母音の潜在的な存在を示す）．Cf. gen. sg. ущелья = уще/l'j-a/.

移動母音 /и/ の現れる例を 80 年アカデミー文法 (I. 434-435, 510, 680-681) から引用すれば，以下の様になる：名詞における交替《ゼロ — /и/》：яйц^{1}о — я^{1}иц; 末尾 –ь(я) をもつ名詞（語尾にアクセント）ектень^{1}я “a kind of church singing”（教会スラヴ語 , cf. Middle Gk. ἐκτενής）— ектен^{1}ий. 動詞における交替《/и/ — ゼロ — /e/》：бить, бил —

бью, бьёшь, бьёт, бьём, бьёте, бьют, бьющий, бей(те). 同様な交替《/и/ — ゼロ — /е/》の例：лить, пить, шить. 語形成における交替《/и/ — ゼロ》(/ч/ と交替する /к/, /ц/ の前で見られる)：кролик — крольч-иха, крольч-онок, крольч-атник; Италия — ита/л$_1$j-а/нский (италь^{1}янский). 交替《ゼロ — /и/ 》：цифра — цифирь-ø.

特に，上で言及した ущелий のような，この移動母音 и が語幹末の j の前に現れる場合に注意しなければならない．Unbegaun (1979: 41) はこの移動母音 и について次のように書いている：«The few nouns in *-ья* with an unstressed final syllable take *-и-* instead of *-е-* as the mobile vowel, by a pure convention of orthography: г^{1}остья ‘visitor’ (fem.), gen. pl. г^{1}остий.» [6]　これを分かりやすく言えば,「移動母音が /j/ によって後続されるとき，移動母音の /e/ は正書法でアクセント下では е と書かれ，アクセントの外では и と書かれる（書記法のスラボニア語化）．例えば，nom. sg. питьё <p’it’j-o>《飲み物》，gen. pl. пит^{1}ей <p’itej-ø>; nom. sg. г^{1}остья <gost’j-a>《女性の客》，gen. pl. г^{1}остий <gostej-ø>; nom. sg. копьё <kop’j-o>《槍》, gen. pl. к^{1}опий <kopej-ø>．例外としての я：gen. sg. з^{1}айца <zajc-a>, nom. sg. з^{1}аяц <zajec-ø>《野ウサギ》.」(Comtet 2002: 77)

７．所有形容詞の男性単数主格形 (лисий) は語尾ゼロの短語尾形である

лисий《キツネの》のような所有形容詞の ий は接尾辞であり語幹の一部であるが，これを語尾と勘違いする人は多い．例えば，八杉貞利・木村彰一『ロシヤ文法』岩波書店 (p. 56) は，рыбий《魚の》の語幹を「рыб-」とし，これを「軟変化 II」として分類している．そしてこの変化について次のように注釈している：「軟変化 II は従来の文法では物主形容詞の一部として取扱われた．軟変化 I【летний タイプ】との変化上の相違は単数主格以外のすべての変化において語尾の前に ь が置かれてあり，単数中性主格（＝対格）-ье，単数女性主格 -ья，同上対格 -ью，複数主格（＝対格の場合には対格も）-ьи となることである.」(ibid.) 我が国の代表的な文法書（初版は 1953 年とかなり古い）である，八杉貞利・木村彰一『ロシヤ文法』が語幹を間違えているのであるから，それ以後の文法書が語幹を間違えていることは当然なことかもしれない．こういった記述は単なる外見的な形態を羅列して述べたにすぎず，主格の男性形と他の主格形との繋がりが分からない（主格形はすべて短語尾形）．さらに主格と斜格における短語尾と長語尾のダイナミズムな動きも見落とされている（注 7 を見よ）．他の文法書や辞書でも同じ間違いが見られる．和久利誓一『テーブル式　ロシア語便覧』評論社（p. 60）では，л^{1}исий, в^{1}олчий の -ий は「長語尾」と見なされ,「短語尾はなし」と書かれている．『博友社ロシア語辞典〈改訂新版〉』(p. 1525) も「短語尾なし」と書いている．最近出版された『プログレッシブ・ロシア語辞典』（小学館 2015）の「形容詞長語尾の格変化語尾」の表 (p. 18) では「形 9」として男性の単数主格が -ий と記され，これを「格変化語尾」と見做し

ている．我が国の文法書や辞書にはこの形態の正しい記述は全く見られない．

古くはシャーフマトフもこの形を誤って解釈している (Шахматов 2012: 172). Виноградов (1972[2]: 165–166 [1947: 198-199]) は，Шахматов の考えを次のように批判している：「従って，現代ロシア語における -ий, -ья, -ье で終わる形容詞の全ての形を Шахматов は, 斜格の -его, -ему, 等を基にして, 名詞の曲用にではなく, 代名詞の, 長語尾の曲用に起源を求めている．しかも, 彼は主格形と対格形の中に《重音省略 гаплология》, つまり２つの同じ結合の単純化を見ている：козьяя の代わりに козья, козьее の代わりに козье, 等．しかし，また他の，それに劣らず確からしい，козий の曲用体系の説明もある．この説明によれば，主格と対格は古い名詞の，短語尾の形を保持し，他方，他の格は синий に類似した長語尾形容詞の曲用形との類推の道を進んだ，というものである.」

今日では，上の Виноградов の言う，主格（とまた対格）は短語尾形，その他の斜格は長語尾形であるという説が定説である．即ち，この -ий を移動母音 и と /j/ から成る語幹の一部（語尾はゼロ）と見なすことが定説である．例えば，プラハ版アカデミー文法 (§686) は，лисий の語尾について次のように書いている：「<-#j=> で終わる語幹における語尾（ゼロ語尾あるいは完全な語尾）の特徴に従って，交替 <-Cej=ø> | <-Cj=V> が生ずる；非末尾位置で音素的レベルにおいて /-Cij/ | /-CjV/ が現れる．これは正書法の形 л[1]исий | л[1]исьего, … に一致する」. これから明らかなように男性の単数主格形では移動母音 e が現れている．この移動母音 e は /j/ に後続されるとき，アクセントの外では и と書かれる（上の６を参照）．従って，男性単数主格は <l’is’#j-ø> → /l’ís’ej/ лисий, 女性単数主格は <l’is’#j-a> → /l’ís’ja/ лись-я, 男性単数生格 <l’is’#j-ovo> → /l’ís’jovo> лись-его となり，主格（また対格）は短語尾形，それ以外の格は長語尾形になっている[7].

この説はまた以下の文献において支持されている．80 年アカデミー文法 (I. 551)：「この見本の全ての格形における形容詞語幹は，男性の単数主格形において /j/ で終わるが，それは先行する移動母音 /α_1/ あるいは /e/ をもっている.」Белошапкова (1997: 519):「注意しなければならないことは，лисий タイプの形容詞の単数主格形においてゼロ語尾が現れていることである．これらの形容詞の語幹は лисиj- と лисj- の形で現れる」．同様に，Реформатский (1975: 86):「синий と лисий タイプのパラダイムはかなり類似しているが，これは人を誤らせる類似である：синий の語幹は軟子音で終わる <с’ин’->, しかし лисий の語幹はヨット й で終わる：<л’ис’ей->. 女性形参照：синяя と лисья.」最近の Л. П. Крысин (Лекант *et al*. 2010: 194–195) も同様である．なお, третий <tr’et’#j-ø> も лисий と同様に移動母音 и をもつ形である (Cf. третья <tr’et’j-a>).

８．前置詞の後ろで３人称代名詞の語頭の /j/ と /n’/ が交替する

教科書や文法書などでは第一次前置詞と 3 人称代名詞が結合するとき，次のように書

かれることが多い:「三人称代名詞斜格（e, ё, и で始まる）が前置詞とともに用いられるときは, н が加わる.」（宇多文雄『ロシア語文法便覧』東洋書店 2009, p. 166）しかしこの通りに行うと，例えば，к нему の場合，/k n+jemu/ > /k njemu/ となり，これを文字表記すれば к нъему と書くことになるであろう（記号 ъ の用法については上の４を参照）.

実際はこのような場合，３人称代名詞の語頭の /j/ と /n'/ が交替するのである．これについて明確に書いているのは，Trubetzkoy (1934: 79) である：「前置詞なしの３人称の人称代名詞形は語根 j からつくられる，例えば:gen. m. jivò, gen. f. jijò, dat. m. jimù, dat. f. jej, instr. pl. jìm'i, gen. prep. pl. jix (его, ее, ему, ей, ими, их). しかし前置詞の後ろで j は n' に交替する：at-n'ivò (от него), u-n'ijò (у нее), k-n'imù (к нему), k-nej (к ней), s-n'ìm'i (с ними), pr'i-n'ix (при них). これらは自由交替 j ~ n' の唯一の場合であり，同時に代名詞語根における離接的交替をもつ子音交替の唯一の例である .」また，Comtet (2002: 169) も参照：「全ての第一次前置詞の直後で，３人称代名詞の語頭の j は《Baudouin de Courtenay の <n' >》と言われる <n'-> と交替する．それ故，それは代名詞の語頭音での <n' > / <j> の交替を引き起こす．位格では代名詞は常に前置詞によって先行されているので，語頭の <n'-> が常に現れる.」同じ考えは Jakobson (1984: 148) «Notes on the Declension of Pronouns in Contemporary Russian»の中にも見られる: “Yet after prepositions the initial “yod” of all the 3. person pronouns changes into a palatalized “n”, and even Russian repetitive constructions of 3. person pronouns in locative forms demand an explicit reference to that locative frame and subsequently a substitution of the prefixal nasal for the initial “yod”. Hence a steadfast commutation of the initial “yod” to the prefixal palatalized “n” becomes a compulsory feature of the 3. person locative in all its grammatical contexts and remains the sole formulation admissible: thus such readings as *pri nëm, nej, nix* are acceptable while **pri ëm, ej, ix* are not.” さらに 80 年アカデミー文法 (I. §1282) も参照.

９．現在語幹は母音で終わることはない（常に子音で終わる）

日本の文法書や教科書の多くは，例えば，動詞 знать の現在語幹を зна- と見なしている．例えば，八杉貞利・木村彰一『ロシヤ文法』岩波書店 (p. 103) では「читать の現在及び不定形語幹 чита- は母音語幹，нести の нес- は子音語幹である.」と書かれている．同じことは多くの入門書や文法書でも見ることができる:「чита- のように, 現在形に共通な部分を現在語幹と呼び，-ю, -ешь … のように，個々の人称や数によって異なる部分を現在人称変化語尾と呼ぶ.」（佐藤純一『NHK 新ロシア語入門』日本放送出版協会 p. 48）

しかし 80 年アカデミー文法（I. 647）は現在語幹について次のように書いている:「第１活用と第２活用の現在語幹は常に子音で終わる（下線は柳沢）．第１活用の現在語幹はペアの硬子音，シュー音，および /j/ で終わる：греб-ут, плыв-ут, вед-ут, вез-ут, стерег-ут,

пек-ут, жм-ут, стон-ут, ор-ут, мет-ут; маж-ут, пляш-ут, скач-ут, брызж-ут, блещ-ут; зна-ют (зна/j-у/т), красне-ют (красне/j-у/т), рису-ют (рису/j-у/т).」80 年アカデミー文法（また 60 年アカデミー文法 (I. 533) でも 70 年アカデミー文法 (404) でも同様）によれば，現在語幹は３人称複数の人称語尾 /ut/ を取り除いた部分である．例えば，знают は /znaj-/ が現在語幹であるとする（語幹を決める際には現在語幹は複数３人称，過去語幹は単数女性形を基にする．これについては 80 年アカデミー文法 I. 646 を見よ）．アカデミー文法の現在語幹のこのような分析は勿論，共時論的観点からのものであるが，音韻論を土台にしたアカデミー文法の分析が正しいのは常識であろう．Исаченко (1960: 31) の現在語幹についての次の発言を参考にされたい:「語幹の音声的交替は文字体系に常に現れるわけではない．ロシア語の正書法を基にして，動詞 читать は不定形と現在時制形において同じ共通の語幹 чита- をもっていると考えることができるかもしれない：чита-ть, чита-л, чита-ю, чита-ет, чита-я 等を比較せよ．しかしこの場合に音素 /j/ を特別な書記法の記号として表示しないロシア語の文字体系は，物事の真の姿を歪めている．２つの語幹の相互関係を分かりやすく示すためには，この場合には転写に訴えることが必要である．(中略) 現在時制の語幹は，現在（未来）時制の複数３人称形から語尾 -ут を分離することによってつくることができる，つまり čitaj-ut (читают) — 語幹 čitaj-. 強調しなければならないことは，語幹に属している音素 /j/ は《前にヨットが付いている》文字 «е», «ю», «я» と文字 «и» の中に隠れており，ロシア語の文字体系の方法によっては分離することができないということである.」

現在語幹を間違えているのであるから，当然，現在語幹からつくられる語形も間違ったものになる．例えば，「命令法語幹が母音に終わる場合には й を用いる．例えば，чита́ть : чита́й … 」（八杉貞利・木村彰一『ロシヤ文法』岩波書店 p. 117）．正しくは，現在語幹が /j/ によって終わっていれば，命令形はゼロ語尾になる：игра/j-у/т — играй（80 年アカデミー文法 I. 621）．また，不完了体副動詞の形成について，「現在語幹に -я (ж, ч, ш, щ のあとでは，つづり字の規則に従って -a) をつける.」（宇多文雄『ロシア語文法便覧』東洋書店 p. 278）とあるが，次の Исаченко (1960: 523) のように言うことが正しい：「不完了体副動詞の語尾は，勿論，音素 /a/ である．しかし現在語幹に硬子音と軟子音のヴァリアントをもつ動詞（n’es- / n’es’-）においては，副動詞形は軟子音のヴァリアントから作られる.」

このように我が国の参考書や文法書は，文字にのみ頼って動詞語幹を分析している．このような分析方法では，80 年アカデミー文法の形態論を理解することもおぼつかないであろう．というのもレスキーン以来の伝統として，80 年アカデミー文法 (I. 648) でも過去語幹と現在語幹の関係を基にして動詞の活用を 10 種類に分類しているからである．例えば，80 年アカデミー文法の I クラスの動詞（子音ゼロ — /j/: игра- ~ игра/j/-）と VI

クラスの動詞（語幹が一致：влек-л-а ~ влек-ут）は，上の文法書の著者たちの方法では同じクラスに所属することになってしまうからである.

10. 述語 нет《存在しない》は「не есть」から由来するのではない

「動詞 быть（在る）の現在形は есть であるが, その否定形「存在しない」は нет（《не есть》のつづまったもの）である.」（和久利誓一『ロシヤ語四週間』大学書林 p. 105）

勿論，これは根拠のない俗説である．この нет（口語で нету）は Slav. *ne e(stь) tu > *nětu > Old Russ. нѣту に由来する．*e(stь) (> есть, 3 sg. pres. “to be”), *tu (> OCS тоу “ἐκεῖ”, Old Russ. ту, Modern Russ. тут “here”) (Vladimir 2011). Черных (1993) も同様の解釈をしている .

11. 受動の意味をもつ不完了体の ся 動詞の主語は不活動体名詞以外でも用いられる

不完了体の ся 動詞の受動の用法についてあるロシア語の入門書は次のように書いている：「不完了体他動詞に -ся のついた形は，場合によって受身の意味を表すが，これは「人や動物」を表す主語については用いられず，また３人称の形（単・複）しかない.」（佐藤純一『NHK 新ロシア語入門』日本放送出版協会 p. 220）;「不完了体 ся 動詞のあるものは受動（受身，被動）の意味を持ちうる．ただし不活動体名詞の３人称が主語の場合にしかこの表現は使われない.」（安岡治子『総合ロシア語入門』研究社 2011, p. 224）.

上のような断定的な決めつけが間違いであることは，アカデミー文法をはじめとする多くの文法書が示している．不完了体の -ся 動詞は，主語が３人称以外でも受身の意味を表すことができる（勿論，主語が３人称の単数と複数が圧倒的に優勢であるけれども．70 年アカデミー文法 : §857）．また主語が３人称の有生の場合にもこの種の動詞は受身の意味を表すことができる．80 年アカデミー文法 (I. 616) からの主語が３人称以外の例：Потом я где-то … приглашаюсь уже прямо Мухиным (Н. Пирогов). 次の例も参照：я бреюсь у парикмахера. この文を Fr. Kopečn は受動に隣接する形としているが (Исаченко 1960: 390)，Harrison (1967: 11–12) は受動文と見なしている．Harrison (ibid. 11-12) は, 主語が自分自身に行為を向ける再起動詞，例えば，мыться《自分の身体を洗う》，одеваться《服を着る》，бриться《自分の顔を剃る》のような動詞は，また受動の意味でも使われるとする．例えば，Я бреюсь в этой парикмахерской “I get shaved in this barber’s shop”. この文は《床屋で自分がひげを剃る》という意味ではないので，再帰の意味ではなくて受動の意味である (“The meaning here is clearly passive rather than reflexive.” ibid. p.20). 主語が３人称の「活動体」では，不完了体の -ся 動詞が受動の意味をもつ例は多い．例えば，наиболее крупные и красивые бабочки встречаются в тропиках “the biggest and

most beautiful butterflies are found in the tropics” (Harrison, ibid. 14–15); Он считается моим другом《彼は私の友達と見なされている》(Исаченко (1960: 397) はこれを “пассив” としている)；он часто заставался (был заставаем) врасплох（70 年アカデミー文法 : 352）.

これについてプラハ版アカデミー文法 (1: 286) は次のように書いている：「受動・再帰態の使用は，分析的な受動と異なり，主語として人が現れる構文（特に１人称と２人称をもつ構文）では際だって制限される．また命令法では全く排除される．（中略）上で引用した制限にも拘わらず，結局のところそれでも（言語外的な要因のために）行為特徴が一義的に受動と理解されるコンテキストがかなり大量に存在すると言うことができる.」80 年アカデミー文法 (I. 617) 参照：「不完了体の再帰動詞をもつ構文において，行為主体の意味をもつ具格がないときには受動性の意味はある程度弱まる．このことは後置辞 -ся をもつ動詞は受動相の動詞としても，また能動相の動詞としても解釈されうることを意味する：Ишь, как в старину-то люди *хоронились*, — сказал мне какой-то старик (Бунин)《昔は人々はこんな風に埋葬された／身を隠した，とある老人が私に言った》.」

ся 動詞全般を扱った Янко-Триницкая (1962) において，受け身の意味をもつ ся 動詞の主語の人称形について次のようにかなり明確に 3 人称以外の存在が論じられている：「人称に関しては，完了体の受動動詞でも不完了体の受動動詞でも人称の使用の制限が次のように指摘されている：《一般に -ся で終わる形は単数と複数の３人称でのみ用いられる；１人称と２人称を表現するためには，受動態の第１番目の形成方法（つまり受動分詞 — Н. Я.）に訴える》(Шахматов 2012: 189). 語形変化の規則性を解明する際には次のことを区別することが重要である：当該の形は研究される語範疇内で形成されるのか，またその形は様々な原因であまり使われないだけなのか，あるいは全く形成されないのか．実際，受動の動詞は１人称と２人称形では稀にしか使われない．というのはこれらの動詞によって意味される客体からの受動行為は稀に発話の人称に組み入れられるからであり，またロシア語においては受動の再帰形の意味に近い意味を伝える受動分詞形があり，１人称と２人称代名詞ではより好まれて使われるからである．しかしながら上で指摘された受動動詞の形は用いられており，それ故，それらの形を絶対に否定することはできない．例えば, «Когда я пришлю Вам контракт подлинный — предложите Вы этой фирме издать полное собрание моих сочинений. *Я* здесь очень *читаюсь* — «Фома» на-днях вышел 17-м изданием» (А. М. Горький. Письмо И. П. Ладыжникову от августа 1906 года). »《私が貴殿にオリジナルの契約書を送り届けますので, この会社に私の著作全集を出版するよう提案してください．私はここでは大変読まれています .『フォマー』は先日 17 版として出版されました》.」(ibid. 143-144)

12. 完了体の ся 動詞は受け身の意味を表すことができる

完了体の ся 動詞は受け身の意味をあらわすことができないとする見解は，多くの専門文献に見られる．例えば，80 年アカデミー文法 (I. 616) は，受動の意味の後置辞 -ся をもつ完了体動詞について注の中でのみ触れているだけである．また Янко-Триницкая (1962: 132) によれば, «Грамматика русского языка» (Изд-во СССР, 1952, т. I. стр. 35, 506) では受動の意味をもつ完了体の動詞派生の不可能性を認めているとしている：«Формы страдательного залога на *-ся* образуются только от глаголов несовершенного вида». 70 年アカデミー文法 (352) も注の中で次のように書いている:「完了体動詞にとって《後接辞 -ся をもつ受動態の動詞—後接辞 -ся なしの能動態の動詞》の対立は非生産的である．例えば，Но нынче получилась от него телеграмма (Л. Толст., письмо жене, 3/XI 1892).」Исаченко (1960: 362) は完了体動詞から受動の接辞形【-ся をもつ形】はつくられないとして，次のように書いている:「この点でロシア語は,（未来時制の意味をもつ）ペルフェクト現在形の受動形が自由につくられるスロヴァキア語やチェコ語とは異なる：*Všetko sa pripraví* «всё будет приготовлено». ロシア語では «всё приготовится» と言うことはできない.」このような見解は，我が国の文法書等にも見られる．例えば，和久利誓一『テーブル式　ロシヤ語便覧』には,「完了体動詞 -ся のついたものは原則として被動の意を有しない．従って完了の意味には完了過去の被動形動詞を用いる .」(p. 107) とある．またかなりはっきりと次のように書いてある本もある:「なお完了体他動詞に -ся のついた形は受身を表すことはできないことに注意せよ.」（佐藤純一『NHK 新ロシア語入門』日本放送出版協会 p. 221）

これに対して，プラハ版アカデミー文法 (§372) は「受動の意味で完了体の再帰動詞は特定の場合に使われる：Всестороннему исследованию *подвергся* литературный язык … — День быстро *сменился* ночью.」としている．また，Янко-Триницкая (1962) は次のように受け身の意味をもつ完了体の ся 動詞を認めている:「実際，受け身の意味をもつ完了体の再帰動詞に出会うのは，不完了体の受け身の意味をもつ再帰動詞よりかなり稀であるが，しかしそれらが単に規範からの逸脱であるとか，例外であるとかと見なしてはならない.」(ibid. 132) そして文学作品からの実例 (ibid. 132–134, 141–143) をかなりの数にわたって引用している．例えば，«[комедия] готова. К понедельнику *перепишется*, во вторник *пошлется*, в среду будет у вас» (Н. А. Островский. Письма). 具格をもつ例：«Вовек не *позабудется Народом* Евфросиньюшка» (Н. А. Некрасов. Кому на Руси жить хорошо). Янко-Триницкая はさらに書いている：「しかしそのような動詞の数は非常に限られている．受け身の意味をもつ完了体の動詞の数の少なさは，恐らくロシア語において受動動詞の活用形とシノニムの，完了体の他動詞からつくられた受動分詞が存在していることに関連している.」(ibid. 134)「受身の意味の【再帰】動詞が主に不完了体の他動

詞から形成されるという一般的主張は反論を引き起こさない．それにもかかわらず，完了体動詞からもつくられる，受身の意味の再帰動詞が存在する．これらの完了体の受身の動詞においては時制形の使用にいかなる制限がないし，また過去時制形に出会うのは未来時制形よりも稀なことではない．しかも前世紀の作家だけでもなく，現代の作家においてもそれは見られる．例えば，«Трое суток бегал Антон, разыскивая повсюду свою клячонку; все было напрасно: она не *отыскалась*» (Д. В. Григорович).《アントンは３昼夜自分の痩せ馬を至るところ探して走り回った；しかし全て無駄だった．馬は見つからなかった》.」(ibid. 141)　彼女はこの受身の意味の完了体 -ся 動詞について，次のような結論を出している:「受動の意味の再帰動詞からの様々な語形変化形の形成の可能性を眺めると，次の結論を出すことができる：文献に指摘されている，受身の再帰動詞の語形変化体系の欠落はいくらか過大評価されており，今観察されている動詞は，そこから命令法の形が作られないこと，また副動詞形が極めて稀にしか作られないことによってのみ他の再帰動詞と異なっている．他の語形変化形に関して（ここには完了体動詞からの過去時制形，１人称と２人称形，また不定形も含まれる），これらの形の幾つかは使用が制限されているけれど，今観察されている動詞は如何なる例外も示さない.」(ibid. 148)

Harrison (1967: 17) はさらに踏み込んで，この受身の意味の完了体 -ся 動詞について次のように述べている：«These reflexive verbs whose perfective form is used with passive meaning make up quite a large group.»　Harrison (ibid. 15–21) は以下のように完了体の他動詞からつくられた受動過去分詞形と受け身の意味をもつ完了体の再帰動詞形とのシノニムを否定している.「ロシア語の площадь была покрыта снегом という文は状態をあらわすので，英語の “the square was covered in snow” と訳すことができる．これに対して，行為を表す “became covered” となれば，ロシア語では再帰動詞の完了体動詞を使って次のように訳されよう:площадь покрылась снегом. 行為（完了体の再帰動詞）と状態（受動過去分詞）を表す次の例を比較せよ:День почернел и вдруг *озарился* мигающей яростной вспышкой. (Panova, Серёжа) “The day grew dark and was suddenly illuminated (i.e. became lit up) by a flickering flash”. — Они очутились в шёлково-шуршащем, ласково-щекотном, свежо и горьковато дышащем лиственном шатре. Высоко над их головами шатёр *был* золотисто *озарён* закатом, а чем пиже, тем гуще темнели сумерки. (Panova, Серёжа) “They found themselves under a silkily rustling, tenderly caressing, freshly and pungently smelling awning of leafy branches. High above their heads the awning was illumined by the golden light of the sunset, and lower down, the darkness of twilight became thicker and thicker”.」
そして Harrison (ibid. 17-20) は受動を表す完了体の再帰動詞を (a) から (p) に分類しながら以下の様に列挙している（その一部を引用する）: (a) “being covered”: задёрнуться “to be drawn over”. (b) “being filled”: заполниться, наполниться “to be filled”. (c) “being

spoilt”: испортиться “to be spoilt”. (d) “being blocked”: заколотиться “to be boarded up”. (e) “being closed”: закрыться “to be closed”. (f) “being opened”: открыться, отвориться, отпереться “to be opened”. (g) “being revealed, laid bare, found”: открыться, обнаружиться “to be revealed, discovered”. (h) “being lost”: потеряться. (i) “being fastened, unfastened”: прикрепиться “to be fastened”. (j) “being cooked”: зажариться “to be fried, roasted”. (k) “being realized, fulfilled”: выполниться. (l) “being created, formed, destroyed”: образоваться. (m) “being illumined, darkened”: осветиться. (n) “being taken apart”: разобраться. (o) “being connected, disconnected, separated”: соединиться. (p) “being distributed, divided, set apart”: распределиться.

13. 完了体副動詞は決していつも主節に時間的に先行する行為を表しているわけではない

完了体副動詞について，ある入門書に，「現在副動詞のポイントは同時性でしたが，過去副動詞【完了体副動詞のこと】はそれより先におこなわれた行為を示します．つまり，主節の時制よりも常に前なのです.」（黒田龍之助『初級ロシア語文法』三修社 2012, p. 386）とある（下線は柳沢）．多くの入門書が「完了体副動詞は，完了体の動詞からつくられ，主動詞の表わす動作の始まる以前に完了する動作を表す.」（和久利誓一『ロシヤ語四週間』大学書林 p. 266）と書いてあるからといって，完了体副動詞によって表される行為が，主節の行為より時間的に「常に前」の行為を表すとは限らない．主節の行為に継続する行為を表すことも可能である．

この用法について 80 年アカデミー文法 (I. 672) によれば,「完了体動詞の副動詞は様々な時間的関係を伝えることができる．特に，１．主文に先行する行為：*остановившись*, сказал《立ち止まってから言った》; *остановившись*, скажет《(彼は) 立ち止まってから言う》；２．先行する行為の結果としての状態の同時性：сидит, *нахмурившись*《（彼は）険しい表情になって坐っている》; сидел, *нахмурившись*《（彼は）険しい表情になって坐っていた》; будет сидеть, *нахмурившись*《（彼は）険しい表情になって坐っているだろう》; ３．主文に継続する行為：расстегнул сюртук, *открыв* рубаху навыпуск《フロックコートのボタンを外して，シャツを（ズボンから）さらけ出した》.」 さらに，主要な文法家はこう書いている．Виноградов (1972[2]: 311–313 [1947: 389-391])：「しかし完了体副動詞は決していつも（時間的に）先行する行為を表しているわけではない．(中略)（時間的な）先行を表さない副動詞構文の第 3 番目のグループでは，完了体副動詞は完了体の過去時制形で表現される動詞に隣接し，その後ろに立つとき，その完了体副動詞は（時間的に）先行するのではなく，同時でさえもなくて，あたかも直接に継続する行為（それは主要行為の有機的結果である）を示す．こういった場合の副動詞は主要行為に伴う

結果を意味し，その実現が主要行為の遂行によって条件付けられる結果を表す．例えば，Он зажег серную спичку, *осветив* синим огнем свое лицо хорька, измазанное сажей. (Горький)《彼は硫黄マッチを擦って，煤だらけになったイタチのような自分の顔を青い火で照らした》.」Исаченко (1960: 534–537) は，完了体副動詞は「純粋に消極的な一般的意味をもつ,《相対的な時制的意味》対立の弱い項であるので，並外れて広い個別的意味の範囲をもっている」として，この副動詞は時間的な先行性だけではなく，後続的行為，さらに同時的，主要行為に随伴する二次的な行為といった個別的意味ももつと言う．そして不完了体副動詞と違って，完了体副動詞はプロセスとしてではなく，出来事としての二次的な行為を表すとし，イサチェンコは副動詞と主動詞の出来事あるいはプロセスの時間的関係を次のように書いている：１．完了体副動詞の前置的用法（副動詞を主動詞より前に置くこと）は時間的な先行性という意味解釈にとって好都合である：Окончив университет, он вернулся на родину.《彼は大学を卒業すると故郷に帰った》２．時間的な先行性という個別的な意味をもちながらも，完了体副動詞の後置的用法（副動詞を主動詞より後ろに置くこと）は馴染みがない，非典型的なものであるが，しかし理論的には全く可能である：Он вернулся на родину, окончив университет. 時間的な先行性の意味は通常は１.の配置が普通である．３．完了体副動詞の後置的用法は「非・時間的な先行性」の意味解釈には好都合である．結果としての状態：Анна шла, опустив голову (Л. Толстой)《アンナは頭を垂れて歩いていた》；主動詞の行為完了の後になっての副動詞の行為の完遂：Ганна поспешно влетела в хату, захлопнув за собою дверь (Гоголь)《ガンナ（アンナ）は急いで百姓家へ駆け込むと，すぐにドアをパタンと閉めた》．後者についてイサチェンコは次のように書いている：「しかしこの《後続する行為》の意味は何によっても表現されない．完了体副動詞それ自身は主要行為との同時性特徴を表現せずに,「随伴的な状況」として解釈される．《後続する行為》の意味は完了体副動詞形の文法的意味の分析結果ではなくて，発話内容全ての論理的分析の結果である．もし完了体副動詞が副次的な行為と主行為との同時性を明示的に表さないとき，それは語彙的，位置的な好条件があれば，主行為の後に現実面で実現する行為をもまた表すことができる .」[8]

14. 不完了体副動詞は決していつも時間的に主節と同時の行為を表しているわけではない

多くの教科書や文法書では,「不完了体副動詞は主節の動詞と同時に行われる動作を表す」のように書かれることが多い．さらに次のように書いてある参考書もある：「不完了体副動詞は，主動詞が過去，現在，未来のいずれであっても，つねにそれと同時の動作を示す.」（下線は柳沢）（和久利誓一『ロシヤ語四週間』大学書林 p. 266）

80 年アカデミー文法 (I. 672) は次のように書いている：「不完了体動詞の副動詞は主

文の行為との同時性を表す：бежит, *прихрамывая*《(彼は) 足を引きずりながら走って行く》; бежал, *прихрамывая*《(彼は) 足を引きずりながら走って行った》; будет бежать, *прихрамывая*《(彼は) 足を引きずりながら走って行くだろう》.」

上で述べた不完了体副動詞の用法はいずれも副動詞と主文の行為の同時性を述べている．しかし不完了体動詞のアスペクトの様々な意味から，不完了体副動詞の表す行為は主動詞によって表される行為と「常に」同時に行われるとは限らないことも事実である．このことについて，Виноградов (1972[2]: 308-309 [1947: 385-386]) は次のように書いている：「かくして，不完了体語幹からつくられた -а, -я で終わる副動詞形そのものは，本質的にその時制を有しない．即ち，それは形態論的に現在時制分詞と同じ時制的ニュアンスを表現しない．ところで文中においては，この形態の超時間性は主行為との同時性として解釈される．しかしそれにも拘わらず，発話の中で反復，多回，慣習といったアスペクトの意味が強調される場合には，不完了体副動詞は主要行為にたいして同時的なものでなくて，主要行為に常に随伴する副次的な行為，例えば，時間的な先行としての行為を表すことができる．例えば，*Вставая* на рассвете, она спускалась в кухню и вместе с кухаркой готовила закуску к чаю. (Горький)《夜明けに起きると，彼女は台所へ降りていって，料理女と一緒に軽い朝食を準備するのであった》; Раза два в год бывал в Москве и, *возвращаясь* оттуда, шумно рассказывал сказки о том, как преуспевают столичные промышленники. (Горький)《年にほぼ二度ばかり彼はモスクワに行ったが，そこから帰ると，首都の企業家がいかに儲けているかという法螺話を声高に物語るのであった》.」

このように不完了体動詞の副動詞は, 場合によっては主動詞の行為との「同時性」を表さず，時間の継起の意味を表すのである．Morison (1959: 43) も次のように書いている：«The Gerund of Imperfective verbs occasionally appears to be used with the sense of ‘having done’.» 以下の例は Morison (1959: 43–44) からの引用：Он иногда исчезал на месяцы и, *возвращаясь*, бывал встречаем опять той же улыбкой. “Sometimes he would (used to) disappear for months and, returning, used to be met once more (again) by the same smile.” Morison によればこの場合の不完了体は次のように説明される：«the form is perhaps influenced by the Imperfective nature of the sentence». さらに次の例：Утром вздремнул, сидя в кресле, не *раздеваясь*. “In the morning he dozed off, sitting in an armchair, without getting undressed.” この場合の不完了体動詞の用法は Morison によれば次のように説明される：«The imperfective is perhaps used under the influence of the negative.» また видя を使った例：И Данило, *видя*, что около него что-то не то, стал задумываться. “And Danilo, seeing (= having seen) that about him something was wrong, started to be thoughtfull.” Morison によればこの видя の用法は，видеть があるコンテキストにおいて完了体として使用さ

れることによって説明される，としている．

15. 運動の動詞（移動の動詞）から派生される動詞のアスペクトの問題点

教科書や文法書は，次のように運動の動詞の接頭辞化とアスペクトの関係について書いている：「移動の動詞の対に接頭辞がつくと，定動詞だったものが新しい意味の完了体，不定動詞が同じ意味の不完了体になり，前項に挙げた定・不定動詞の意味の区別はなくなる．」（宇多文雄『ロシア語文法便覧』東洋書店 p. 235）類似の記述は日本のほとんど全ての教科書，入門書，文法書に見られる．

こういった考えには次のような問題点がある：

１）不完了体の単純動詞に接頭辞を付加すれば完了体が派生されるが，不定動詞だけが不完了体を派生させるのはアスペクト派生の一般原理から逸脱している．

２）везти, вести, гнать, идти, нести, лететь の６つの動詞以外の運動の動詞については，上で述べた派生方法は用いられない．例えば，тащить — таскать に対して втащить — втаскивать, катить — катать に対して прикатить — прикатывать, лезть — лазить に対して влезть — влезать, плыть — плавать に対して доплыть — доплывать.

３）完了体動詞 сходить《行ってくる》のような動詞は，不定動詞に接頭辞がついているのにも拘わらず完了体である．

４）完了体の сходить (в город)《(町に) 行ってくる》，проходить (всю ночь)《(一晩中) 歩き回る》，походить (по комнате)《(部屋の中を) 歩きまわる》のような動詞は，本来の不定方向の運動の意味を保持している．

これらの問題点は，次のイサチェンコ Isačenko (1962: 432ff.), Исаченко (1960: 325ff.) の考えを採用することによって解決される．Isačenko は６個の定動詞 везти, вести, гнать, идти, нести, лететь だけが，そのアスペクト形成に際してペアを成す運動の動詞の接頭辞化によってつくられることをありそうもないことと考えている．イサチェンコの論拠は Gabka (1975: 124ff.) によって纏められているので，それを引用すれば以下のようになる：「(a) 語形成とアスペクト形成の原理は，全てのペアを成す運動の動詞において同じ原理であって差し支えない．これは次のことを意味する：単純語はどの場合にも接頭辞化のさいに完了体になる．(b) これらの形とチェコ語，スロヴァキア語，スロヴェニア語における相当する等価語の比較は，これらの不完了体化の２次的な特徴をはっきりさせる．(c) 不定動詞の接頭辞化によって，単に動作様態の意味をもった完了体動詞だけが生じる．それに関しては поносить タイプの動詞が支持している．」

Isačenko の考えに従うならば，次のような議論が可能であろう．まず，ロシア語の動詞アスペクトの一般的な派生方法をみれば，完了体は基底となる単純動詞（不完了体）に接頭辞を付加することにより派生する（Исаченко 1960: 152–154 も参照）．その場合には

単純動詞の語彙的意味を変えることも変えないことも可能である．例えば:думать I《考える》→ выдумать P《思いつく》[I = imperfective, P = perfective]（この場合，２つの動詞はアスペクトの対（ペア）をつくらない）．二つの動詞がアスペクトの対をつくらない場合，さらにこの完了体の выдумать から不完了体を派生することができる：выдумать P → выдумывать I《思いつく》（この２つの動詞はアスペクトの対をつくっている）．これがロシア語動詞の一般的なアスペクト派生の方法である．従って, これを敷衍すれば, imperfective tantum である運動の動詞（定動詞であろうと不定動詞であろうと）に接頭辞を付加すれば完了体になると考えることは自然であろう．

基底となる定動詞は imperfective tantum であり，限界到達に向けられた運動を表す限界動詞である：везти (поклажу домой), вести (ребенка в школу), гнать (собаку на улицу), ехать (в Москву), идти (в магазин), катить (мяч к воротам), лезть (на дерево), лететь (на юг), нести, тащить (груз в трюм), плыть (к берегу), ползти (в нору), гнаться (за врагом), нестись (домой)．このような動詞の imperfective tantum の特徴は, 接頭辞と結合するとその語彙的意味が常に変化することである (нести — принести)．このような動詞には「空の пустой」（アスペクトのみを変える）接頭辞（このようなアスペクトのみを変える接頭辞を “чистовидовые префиксы” という — 80 年アカデミー文法 I. 585）がない．このような定動詞から接頭辞を付加することによりつくられた完了体動詞は，対となる不完了体動詞を派生することができる（70 年アカデミー文法 §843 参照）．その不完了体動詞の派生方法は，次のような異なる二つの方法によってつくられる（80 年アカデミー文法 (I. 591) 参照）：(1) 接頭辞をもつ везти, вести, гнать, идти, нести, лететь の６つの動詞（例えば，привезти, принести, улететь）では，不完了体の形成は無接頭辞の定・不定動詞の関係をモデルにして行われる．нести — носить の関係をモデルにして，アスペクトの対 принести — приносить がつくられる．(2) その他の全ての接頭辞化された運動の動詞においては，不完了体は二次的な不完了体化 имперфективация（これは接尾辞 -ива-/-ва-/-а- による不完了体を派生し，対となる不完了体をつくる [80 年アカデミー文法 I. 588-589]）によってつくられる：прикатить — прикатывать, влезть — влезать, приплыть — приплывать, приползти — приползать, забрести — забредать, притащить — притаскивать, прибежать — прибегать, уехать — уезжать. これら (2) の例を見れば分かるように，imperfective tantum である不定動詞に接頭辞を付けても不完了体にはならない．また (1) も imperfective tantum である不定動詞に接頭辞を付けたから不完了体の動詞になったのではなくて, アカデミー文法を援用すれば無接頭辞の定･不定動詞をモデルにして派生しただけである．あるいはまた Исаченко (1960: 328) の言う「類推的形成の結果」, あるいは「приносить (нс/в) における -носить の要素と単純動詞 носить との音声的一致は，歴史的な偶然である.」(ibid. 329) また接頭辞を付けて派生した動詞の定と不定の意

味の対立は，無接頭辞の定と不定の対立ほど明確ではないが存在する．例えば，定動詞 идти からの派生した пройти (P) — проходить (I) (мимо дома)《(家のそばを)通り過ぎる》に対する，不定動詞 ходить から派生した проходить (P) (всю ночь)《(一晩中）歩き回る》において，前者についてはその多義性のために運動の動詞の意味は中和しているが（あるいは“Im Verb проходить/пройти ist die Fähigkeit, den determinierten oder indeterminierten Verbalcharakter auszudrücken, erloschen. [Isačenko 1962: 440]），後者の動詞には「本来の運動の動詞の行為特徴が保持されている (Das Verb проходить bewahrt den indeterminierten Verbalcharakter des Augsgangsverbs ходить. (ibid. 440))」．後者の不定の意味をもつ他の例を参照：в¹ыходить (все меата), исходить (весь лес), обходить (весь город), переходить (все окрестности), походить (немного), сходить (в аптеку), избегать (все магазины), объездить (всех знакомых), облазить (все деревья), слетать (в Москву), проплавать (несколько часов), натаскать (дров). (Исаченко 1960: 340-342).

次に，基底となる不定動詞は imperfective tantum であり，常に非限界動詞である．このような動詞の imperfective tantum の特徴は，接頭辞と結合するとその語彙的意味が常に変化することである．この単純動詞に接頭辞を付ければ完了体動詞になる：ездить I — в¹ыездить P《調教する》《(馬車で）稼ぐ》；носить I — обносить P《着古す》．これらの完了体動詞から二次的に不完了体化によってアスペクトの対がつくられる：в¹ыездить P — выезж¹ать I, обносить P — обнашивать I.（70年アカデミー文法 §843 ではこういった動詞から不完了化によって不完了体のペアをつくることができるのは，接頭辞 вы- だけであると書いてあるが，об- も可能である）．また他の場合には，接頭辞による形成は《始まり》(ходить — заходить, бегать — забегать),《時間の制限》(походить, побегать),《行為の完了》(отъездить, отб¹егать) の意味をもつ（80年アカデミー文法 I. 591）．同様に，сходить P《行って（帰って）くる》もまた ходить からの接頭辞 с- による完了体派生である（基底となる定動詞から派生した идти I — сойти P — сходить I《降りる》と区別せよ）．さらに同じく不定動詞に接頭辞をつけて完了体にする動詞を参照：проб¹егать (целый час) P《(まる 1 時間) 走り回る》，разб¹егаться P《走り回りだす》，исходить《くまなく歩き回る》，наб¹егаться (вдоволь)《(心ゆくまで) 走る》．このような意味をもつ接頭辞を有する動詞は，закричать が кричать とアスペクト的なペアを成さないことと同じ理由で，perfective tantum である．この派生された動詞は，不定方向の運動（あるいは異なる方向の運動）の意味をもっているので，基となる不定動詞の意味を保持している．これは定動詞に始発の意味を表す接頭辞 по- を付けて派生した完了体 побежать P《走り出す》と，不定動詞に始発の意味を表す接頭辞 за- を付けて派生した完了体 заб¹егать P《走り始める》を比較すれば自ずと明らかである．побежать 動詞は一方向の意味が残る：Он встал и побежал мне навстречу《彼は立ち上がると私の方に向かって走り出した》.

対して，заб[1]егать は不定方向の意味を残している：Он заб[1]егал по комнате《彼は部屋の中を走り始めた》．これら２つの例は Исаченко (1960: 323) より採ったが，イサチェンコは本源的な運動の動詞の定方向と不定方向の意味が派生の動詞にも残っていることを次のように書いている：「上で引用した例における接頭辞【不定動詞に付く接頭辞 за-, по-, про-, с- 等のこと】は，本源動詞に異なる完遂的意味を伝えるが，これらの動詞の行為特徴にいかなる影響も及ぼさない.」また Исаченко (1960: 336) を見よ．以上のことから，運動の動詞のアスペクト形成方法は他の動詞のアスペクト形成方法と同じであることがわかる．また定動詞と不定動詞の運動の方向性は派生の動詞にも保存されると考えることができる．

同様に，Garde (1998[2]: 398) は次のように書いている：「動詞接頭辞化 préverbation は常に運動の動詞のアスペクトを（一般的規則に従って）変えるが，しかし決してその下位・アスペクト【定・不定のアスペクト】を変えない．動詞接頭辞の付加の際に，定動詞はその定動詞の意味を保持する．また不定動詞はその不定動詞の意味を保持するが，しかしお互いに完了体になる．動詞接頭辞そのものは２つのクラスに分割される：運動の方向を示す定の動詞接頭辞 préverbes déterminés，およびそれを示さない不定の動詞接頭辞 préverbes indéterminés である．原則として（１つの例外を除く），定動詞あるいは不定動詞は同じ種類の動詞接頭辞としか結合できない.」

以上から明らかなように，我が国の教科書や文法書において無批判に採用されている，運動の動詞から接頭辞化によって派生される動詞のアスペクトに関する考えは再考すべきであろう．（2016 年 6 月成稿）

* 引用における著者の補足は【 】内に記した.

** 本研究は JSPS 科研費 JP15K02513 の助成を受けたものです.

注

1 Реформатский (1970: 70ff.) にもこの問題に関する学説史概略がある.

2 伝統的に使用される「軟子音」と「硬子音」という用語も学習者を誤らせる用語である.「軟子音」と呼ばれる [p’], [t’], [v’] 等の子音は，より正確に言えば「硬口蓋化子音」（ロシア語では палатализованные согласные）であり,「硬子音」と呼ばれる「非硬口蓋化子音」に対立している．また [j] の音は硬口蓋化が追加の子音特徴ではないのであるから,「硬口蓋子音」（ロシア語では палатальный согласный）と呼ぶべきであろう．オレスト･プレトネル O. B. Плетнер は，音声的な記述が科学的かつ正確な『實用英佛獨露語の發音』（同文館，除村吉太郎譯，55 頁）の中で,「ロシヤ語では口蓋化した子音を『軟い子音』, 口蓋化しない子音を『硬い子音』といふがこの名稱は勿論主観的なものであって，科學的なものではない」，と書いている.

ロシア語の音論に関して最も重要な項目は湿音性の相関（硬子音と軟子音の相関）である．湿音性の相関については，レフォルマッキーもまた次のようにその重要性を強調している：「ロシア語における《硬子音》と《軟子音》についての問題の話題そのものは，ロシア語の発音全体（子音のこのカテゴリーだけに準じるものでなく）の実践的な基礎付けのためにも，また現代ロシア語とその歴史の音声体系を理論的に理解するためにも非常に重要である．また《硬子音》と《軟子音》の相関が一義的である子音組織のためだけでなく，無アクセントとアクセントのある母音組織の可変性の全ての場合を理解するためにも，この問題は非常に重要である．」(Реформатский 1970: 494-499)　日本の多くの教科書は子音の有声性の相関を載せるが，湿音性の相関を載せることが少ない．これは湿音性の相関の重要性についての無理解と関係があろう．Timberlake (2004: 28) の次の発言も参考にされたい：«Russian phonology revolves primarily around two concerns: stress in vowels and palatalization in consonants.»

3「第2系列の母音書記素」については，Garde (1998: 34ff.) を参照.

4 音素と書記素との関係について書かれているのが，ヤーコヴレフ Яковлев (1928 [1970: 123–148]) の著名な論文《アルファベット建設の数学的公式 Математическая формула построения алфавита》である．そこでは，硬子音と軟子音を全て異なる書記素で表す書記法よりも，子音の後ろに２系列の母音文字を置くことによって子音音素を全て表記するほうが書記素の数を減らすことができ経済的であることが数式を使って述べられている．これに関しては, 柳沢 (2014: 169-178) を参照. さらに, ロシア語の書記法と母音（強い位置に現れる母音）との関係については, Аванесов (2015: 284ff.) を参照.

5 同様な記述は Halle (1959: 64) にも見られる．他方，Аванесов (2015: 135) はこの現象について全く触れていない．これについては Аванесов (1956) を批評した, ヤコブソーンの「ロシア語音韻論についての批判的一考察」（ロマーン・ヤーコブソン『構造的音韻論』p. 285）も参照されたい．恐らく，Аванесов はこのヤコブソーンの批判に最後まで答えなかったのではないかと思われる．

私の観察によれば，数人のロシア人留学生（シベリア地方出身）をインフォーマントにして調べたところ，これらの例における /v/ の前の子音を有声化するものとしないものがいた．城田俊『ロシア語の音声』(1979, p. 243) は，パノーフ M. B. Панов (1967: 87), Русская фонетика, M. の次のような見解を載せている：「パノーフは к вдове のような場合，現代ロシア語では，[-gvd-] とも [-kvd-] とも発音され，無声子音であっても，有声子音であってもよい；つまり，このような位置では無声・有声がゆれるのが「標準」；そういってわるければ，無声・有声いずれかにきめるというきまりがないのがきまりである；と述べ，ヤコブソンの観察に否定的評価を下しています．それに対し，バラノーフスカヤ (C. A. Барановская, 1968) は大量の資料を集め，綿密な分析をそれに加え，その結果，ヤコブソンの観察を確認し，支持しています.」

6 Stankiewicz (1968: 28-29) によれば，ロシア語の正書法はかなり形態音素的であるが，しかしその正書法にはある種の名詞語尾の形態音素的構造を曖昧にするような, 伝統的, 文語的な文字法が含まれている，と書いている．その幾つかの内の文字 *i* についての箇所を参照：«The letter *i*, finally, is used instead of morphophonemic *e* in stems which terminate in *C'#j-*, and in which *e* results from the zero ~ vowel alternation (e.g. in the gen. pl. forms *pedméstij, želánij, šalúnij*).»

7 これは мамин 型の所有形容詞と同じ変化タイプを示す（мамин, мамин-а, мамин-ого）．この名詞屈折語尾（形容詞短語尾）と形容詞語尾（形容詞長語尾）のパラダイム内での使用については次のような階層化が見られる．苗字と所有形容詞のパラダイム内での名詞屈折語尾から形容詞曲用

への変化に関して，次の順序で形容詞語尾が採用される：具格＞位格＞与格，属格＞対格＞主格．苗字と所有形容詞はこのプロセスに沿って様々な点で形容詞語尾の採用が止まる．苗字は男性単数では具格で，女性単数は属格で，複数は対格で．所有形容詞 мамин 型は属格で，чёртов 型は単数の男性と中性は位格で，女性単数と複数は属格で形容詞語尾の採用が止まる．これについては Timberlake (2004: 127) を参照．

8 また Forsyth (1970: 300–302) も参照せよ．

参考文献

Baudouin de Courtenay J. (1929) Einfluss der Sprache auf Weltanschauung und Stimmung. (Sonderabdruck aus *Prace Filologiczne*, XIV) Warszawa.

Baudouin de Courtenay J. (1972) *A Baudouin de Courtenay Anthology. The Beginnings of Structural Linguistics*. Translated and edited with an introduction by Edward Stankiewicz. Bloomington: Indiana University Press.

Comtet R. (2002) *Grammaire du russe contemporain*. Toulouse: Presses universitaires du Mirail, [1ère édition 1997].

Forsyth J. (1970) *A Grammar of Aspect. Usage and Meaning in the Russian Verb. (Studies in the Modern russian Language*. Generel editor: D. Ward). Cambridge: University Press.

Gabka K. (dir.), (1975) *Die russische Sprache der Gegenwart*. Band 2. Morphologie. Düsseldorf, Brücken-Verlag. Leipzig, VEB Verlag Enzyklopädie.

Garde P. (1998[2]) *Grammaire russe: Phonologie et morphologie*. Paris: Institut d'études slaves.
［ポール・ギャルド『ロシア語文法：音韻論と形態論』 柳沢民雄訳　ひつじ書房　近刊］

Halles M. (1959) *The Sound Pattern of Russian*. A Linguistic and Acoustical Investigation (with an Excursus on The Contextual Variants of the Russian Vowels by L. G. Jones). 'S-Gravenhage: Mouton & Co.

Harrison W. (1967: 5–46) Expression of the Passive Voice. *Studies in the Modern russian Language. 4 & 5*. Generel editor: D. Ward. Cambridge: University Press.

Isačenko A. V. (1962) *Die russische Sprache der Gegenwart*. Teil I. Formenlehre. Halle (Saale): VEB MAX Niemeyer Verlag.

Jakobson R. (1962 [1971[2]]) *Selected Writings*. I. Phonological Studies. 'S-Gravenhage: Mouton.

Jakobson R. (1971) *Selected Writings*. II. Word and Language. 'S-Gravenhage: Mouton.

Jakobson R. (1984) *Russian and Slavic Grammar. Studies 1931–1981*. Edited by L. R. Waugh and M. Halle. (Janua Linguarum, 106). Berlin/New York/Amsterdam: Mouton.

Jones D., Ward D. (1969) *The Phonetics of Russian*. Cambridge: University Press.

Karcevski S. (1943) «Remarques sur la phonologie du russe». *Cahiers Ferdinand de Saussure* 3, pp. 7–13. [Karcevski (2000: 13–17)]

Karcevski S. (2000) *Inédits et introuvables*. Leuven: Peeters.

Morison W. A. (1959) *The Present Gerund and Active Participle*. Studies in Russian Forms and Uses. London: Faber and Faber.

Stankiewicz E. (1968) *Declension and Gradation of Russian Substantives in Contemporary Standard Russian*. The Hague · Paris: Mouton.

Timberlake A. (2004) *A Reference Grammar of Russian*. Cambridge University Press.

Trubetzkoy N. S. (1934) Das morphonologische System der russisschen Sprache. *Travaux du Cercle*

Linguistique de Prague. 5_2. Prague.

Trubetzkoy N. S. (1962 [1958]) *Grundzüge der Phonologie*. 3., durchgesehene Auflage. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.

Unbegaun B. O. (1979) *Russian Grammar*. Oxford: Clarendon Press. [First published 1957].

Veyrenc Ch.-J. (1968) *Grammaire du russe*. Paris: Presses Universitaires de France. (Que sais-je? Nº 1278). ［シャルル・ジャック・ヴェラン『ロシア文法』矢野通生訳　文庫クセジュ　白水社．1970］

Vladimir O. (2011) *Russian Etymological Dictionary*. Vol. 1-4. Theophania Publishing. [Edited by Vitaly Shevoroshkin and Cindy Drover-Davidson].

Аванесов Р. И. (1956) Фонетика современного русского литературного языка. Москва: Изд-во московского университета.

Аванесов Р. И. (2015) Русское литературное произношение: Учебное пособие. Изд. 8-е, переработанное и дополненное. Москва: ЛЕНАНД.

Аванесов Р. И., В. Н. Сидоров (1945) Очерк грамматики русского литературного языка. ч. I. Фонетика и морфология. Москва: Государственное учебно-педагогическое издательство. [Реформатский 1970: 249-277]

Белошапкова В. А. (1997) Современный русский язык. 3-е изд., испр. и доп., Москва: Азбуковник.

Бодуэн де Куртенэ И. А. (1963) Избранные труды по общему языкознанию. В 2 т. Москва: Издательство академии наук СССР.

Бодуэн де Куртенэ И. А. (2012^2) Об отношении русского письма к русскому языку. Изд. 2-е. Москва: ЛИБРОКОМ.

Виноградов В. В. (1972^2) Русский язык (грамматическое учение о слове). Изд. 2-е. Москва: Высшая школа. [Виноградов В. В. (1947) Русский язык (грамматическое учение о слове). Москва-Ленинград.]

Исаченко А. В. (1954) Грамматический строй русского языка в сопоставлении с словацким. Морфология. Часть первая. Братислава: Издательство словацкой академии наук.

Исаченко А. В. (1960) Грамматический строй русского языка в сопоставлении с словацким. Морфология. Часть вторая. Братислава: Издательство словацкой академии наук.

Лекант Л. Л. (под ред.) / Касаткин Л. Л., Клобуков Е. В., Лекант П. А. (2010) Соверменный русский язык. Словарь-справочник: пособие для учителей общеобразовательных учреждений. 3-е. издание. Москва: Просвещение.

Лекант Л. Л. (под ред.) / Лекант П. А., Касаткин Л. Л., Клобуков Е. В., Крысин Л. П. (2013) Современный русский литературный язык. Учебник для студентов высших учебных заведений, обучающихся по специальности «Филология». Москва: АСТ-ПРЕСС.

Ожегов С. И., Шведова Н. Ю. (2009) Толковый словарь русского языка. 4-е. издание. Москва: Институт русского языка.

Реформатский А. А. (1970) Из истории отечественной фонологии. Очерк. Хрестоматия. Москва: Наука.

Реформатский А. А. (1975) Фонологические этюды. Москва: Наука.

Черных П. Я. (1993) Историко-этимологический словарь современного русского языка. Том I, Том II. Москва: Русский язык.

Шахматов А. А. (2012) Очерк современного русского литературного языка. Издание пятое. Москва:

ЛИБРОКОМ.

Щерба Л. В. (1974) Языковая система и речевая деятельность. Ленинград: Наука.

Яковлев Н. Ф. (1928) Математическая формула построения алфавита. «Культура и письменность Востока», кн. I. Москва. стр. 41-64. [Реформатский (1970) pp. 123-148.]

Янко-Триницкая Н. А. (1962) Возвратные глаголы в современном русском языке. Москва: Издательство АН СССР.

60年アカデミー文法：АН СССР, Институт русского языка (1960) Грамматика русского языка. 2-е. изд. Москва: Издательство АН СССР, 1960. Т. I. Фонетика и морфология.

70 年アカデミー文法：АН СССР, Институт русского языка (1970) Грамматика современного русского литературного языка. Москва: Наука.

80年アカデミー文法：АН СССР, Институт русского языка (1980) Русская грамматика. Том I. Фонетика, Фонология, ударение, интонация, словообразование, морфология. Москва: Наука.

プラハ版アカデミー文法：Vědecký redakyor: K. Horálek. / Barnetová V., Běličová-Křížková H., Leška O., Skoumalová Z., Strakoveá V. (1979) Русская грамматика, 1. Praha: Aacademia.

城田俊『ロシア語の音声 — 音声学と音韻論 —』風間書房 1979.

オレスト・プレトネル，除村吉太郎譯『實用英佛獨露語の發音』同文館 1926.

柳沢民雄「N. F. ヤーコヴレフ：音韻論，カフカース学，ロシア語学（1）」名古屋大学大学院国際言語文化研究科　言語文化論集　第 36 巻第 1 号．2014. Pp. 169-178.

ロマーン・ヤーコブソン『構造的音韻論』岩波書店 1996.